中川根ふる里通信

＝第71号＝

中川根ふる里通信
昭和61年4月20日創刊
編集・発行・連絡先
〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町
TEL0547-56-0015 上長尾859-6
郵便振替口座00870-4-81556

徳山、加鹿家（神楽面）林家（古面）に伝わる面

天狗　林家

不明　林家

不明林家

鬼　林家

姫　加鹿家

翁　加鹿家

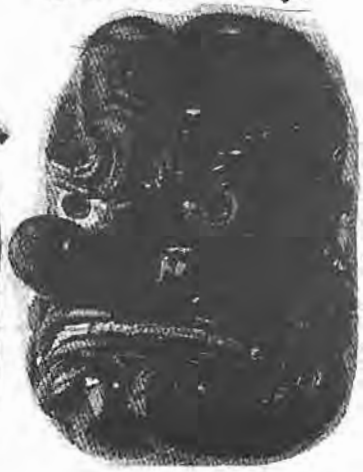
姫　加鹿家

須佐之雄　加鹿家

鬼　加鹿家

殿　加鹿家

天狗　加鹿家


天狗加鹿家

〈徳山神楽調査報告書より〉

新町の名称は
川根本町（かわねほんちょう）に決定!!

合併後の新町の名称が決まりました。「川根本町」となります。
合併の期日が決まりました。「平成十七年九月二十日」となります。
中川根町・本川根町の合併に向けて準備が進んでおりますが、当初の十七年三月三十一日をもって中川根町を終了するが半年伸びて九月となりました。

中川根町長・杉山嘉英さん

本川根町長・鈴木敏夫さん

この社会福祉関係の受賞校は、全国で13の中学校だけです。とても貴重な受賞です。

善行賞受賞 おめでとうございます

表彰された理由は
平成3年以来、毎週2回、アルミ缶回収を行い、その益金で物品を福祉施設に寄贈しているほか、地域周辺の清掃活動も行っている。です。
まさに継続は力なり。先輩から後輩に福祉の心がバトンタッチされて、最高の賞を授けられたのですね。これからも、やさしい心をもって、ご活躍下さいね。よかった、本当におめでとう！

表彰状

中川根町立中川根中学校殿

あなた方は永年にわたり社会福祉に貢献し多くの人びとに喜びを与えました
よってその行為を称え善行盾を贈り表彰します

平成十六年　五月二十二日

社団法人日本善行会
会長　鈴木俊

お茶あれこれ ―第七回―
お茶壺道中とずいずいずっころばし

静岡市　石塚幸男

一　ずいずいずっころばし　胡麻味噌ずい

茶壺に追われてトッピンシャン
抜けたらドンドコショ
俵の鼠が米食ってチュウ　チュウ　チュウ　チュウ
おっとさんが呼んでも、おっかさんが呼んでも
行きっこなァしーョ
井戸の周りで、お茶碗欠いたの、だァれ

誰でも知っているこの童歌は、「お茶壺道中」―幕府の権威を借りた横暴な一行への庶民の嘆きの歌といわれてきた。果たしてそうなのか。その前に「お茶壺道中」とはどんなものだったか、説明してみよう。

江戸幕府が、将軍家以下の人々が飲用する宇治茶を江戸城に運ぶため、毎年「宇治採茶師」に茶壺を持たせて、江戸、宇治間を往復させることを恒例とした。

制度化したのは、三代将軍家光のころだといわれるが、「元和二年三月八日。…女御より酬の局駿府へ参向す。大御所御気色うかがはんためなり。日下部五郎八宗好宇治採茶師にさし、暇給ふ」（徳川実記・続日本国師大系第九巻・経済新聞社）とあるので少なくとも秀忠の時はもう存在していたと考えられる。もっとも家康はもちろん、秀吉のころまでその淵源をたどることもできるらしい。

現在、「駿河本山お茶まつり委員会」が実施している「駿府お茶壺道中行列」は、家康が、本山茶の新茶を茶壺につめ、高冷地でじっくりと熟成させて、九月の彼岸すぎに大日峠から駿府城に移し、その味を楽しんだ故事に因んで行われているのである。なお、静岡市が平成十年から十一年度に実施した発掘調査では、お茶蔵の礎石や陶器片が発見された。またお茶蔵は平成十四年十月復元された。

江戸時代初期に大日峠にお茶蔵が建てられた時、お茶の管理を任されたのは、玉川村の朝倉六兵衛と井川村の海野弥兵衛であった。

海野家の古文書にはこの時の茶壺の預かり状が保存されている。

慶長十七年の文書によれば、それぞれの壺に名前が付けられ、個数も記されている。

たとえば、

一　玉虫之　御壺一ツ
遠江宰相様（徳川頼宣）　御壺一ツ
一　楊柳　御壺一ツ
御あちゃ様（阿茶局）　御壺一ツ
御まんさま（於万の方）　御壺一ツ

のごとくである。

万が一毒でも混入されたら大変だから、管理者の気の遣いようは察するに余りある。

海野、朝倉両氏に管理され、駿府に運ばれた茶は、江戸将軍家や御三家にも届けられ、静岡茶の名声はつとにあがったのである（平成一四年四月一四日付静岡新聞、『世界に静岡茶を売った男』森竹敬浩・静岡新聞社）。

ともあれ、このお茶を運んで往還する一行を「御茶壺道中」と呼んだ。この一行は権威づけられ、大名でも茶壺に会うと、路傍に控えるほどだった。例えば、旧幕

臣の話によれば「えらい権力のあったもので…道中で万石以上の参覲交代などに行き逢っても、道を譲ることをしない。却って先方で出ッくわさないように注意して、こちらの休憩中に行き過ぎるとか、または横路へ避けるとかいう状況だった」（『幕末の武家』青蛙書房）という有様だった。

次のような話もある。

千姫の娘を娶った岡山三十二万石の大守、池田光政の行列にまで、喧嘩を吹っかけたのであった（『広文庫・物集高見』広文庫刊行会）。その話を少し紹介してみよう。

「松平新太郎光政殿、或時御茶壺に御行合ひなされ候時に、御茶壺を道の真中に置かせ、（以下筆者口語訳）お供の者の馬がついうっかりして踏んでしまった。しかし、御茶壺は壊れなかった。その御茶壺付き添いの役人どもは、いろいろ難癖をつけてきた。謝ったが、役人ども容易に後に引かない、あまつさえ、そっちの主人は切腹すべきだと言い張る。光政殿は、捨て置けといいながらも一方で、虎の威を借りる、役人どもに使者を遣わして、手前の馬が御茶壺を踏んだは、まことに遺憾の極みである。しかし、御茶壺が無事な由、重畳至極。この一件は江戸の将軍に直に謝罪するゆえ、さよう心得よ。それにしても大切な御茶壺を馬に踏まれるような所に置いたのは不届きではないか、…」と一本取っている。

それにしても、大名でさえこのような状態であったから、まして、それ以下の者、庶民にとっては迷惑至極、蛇蝎のごとく忌み嫌われたのはいうまでもなかった。

こういうこともあった。

お茶壺の泊まる宿はたいてい本陣であったが、夜中に番人をつけさせ、出火の際に備えて、壺の逃げ道を用意させた。通行のために往来の宿駅では、茶壺の警護はもちろん、街道の清掃をも命じた。その上、車馬の通行を禁止し、厳重に街道を取り締まった。

元禄十四年の岡崎での例を挙げてみよう。

お茶壺の数は二十一個と記されていた。この他に、もろもろのご用の荷物があり、御茶壺奉行、御茶道頭、御茶道、御数寄屋などの人のほか、各自の家来が加わって、多人数だった。この一行を上伝馬町の料理屋で持待した。この時は、岡崎城の家老まで出向いて丁重にもてなしたのである。町では掃除は丁寧に、一行の通行する前日から、往来から見える田畑の耕作、ごみやきの煙などを禁止した。その上、人足の髪やさかやきに手入れを命じ、家々にかかっているわらじをおろさせ、旅人たちを裏町へ回らせるようにした（『雲助・道中・女』和田篤憲・日本公論社）。

次のような悲話も伝えられている。

お茶壺道中のコースの中仙道途中の岐阜でのこと。久遠寺の和尚が本陣設営と接待を命じられたが、沿道民の多大の迷惑をかけることを承知していた和尚は、辞退したのである。激怒した加納城主が和尚を追放した。その時、接待を命じられていた美貌で評判だった、寺社大工の一人娘お千勢が自ら顔に火傷をつくって辞退したという。なお、そのお千勢が歌っていたのが、「すいすいずっころばし」だったという。その後亡くなったお千勢の供養に、住職が木碑を立てたという話も残っている（『歌碑のあるさとを訪ねて』服部勇次・中日新聞開発局）。

とにかく、こういう状態だったので、幕府もその後、御茶壺往来の厳しさをあらためたのである。

二、

さて、前掲の「ずいずいずっころばし」に戻る。この童歌はそもそも、江戸の童歌の一つだと言われ、それが全国的にひろまったとされる。そして、そもそも発祥の地は、北総（千葉県）だという説がある。

すなわち「ずいずいずっころばし」の語源については、里芋の茎、ずいきだと言われる。北総（千葉県）一帯は昔から農産物の豊かな地方で、ずいきがよく採れ、これが江戸の人たちの嗜好に合ったため、千葉から行商人のおばさんたちに背負われて、魚や野菜といっしょに江戸へ運ばれ、歌もついてきた、というのである（『東京のわらべ唄』太田信一郎東京新聞出版局）。

「ずいずいずっころばし」以下「茶壺に追われて…」の意味を想像してみると、『民家で、ずいきのごま味噌和えをこしらえていると、お茶壺道中がやってきた。さあ、大変、外にいた大人たち、遊んでいた子どもたちは、いそいで、家の中に逃げ込んで表戸をピシャンと閉めた。そして家の中で息を殺している。静かになったので、納屋のあたりで、鼠が米俵をかじっている音がよく聞こえる。お父さんが追い払ってこい、と言っても、お母さんが言っても、だれも怖がって行かない。すると井戸のあたりで茶碗が落ちてガチャンと割れる音がして、みんなギクッとする。今すこし、静かにしていよう。怖い行列が行ってしまったら、ドンドコ、また外へ出て遊ぼう…』とまあ、こじつけることができよう。

当たらずとも遠からずと言えるかも…。

さて、この歌が少しずつ表現を変えながら全国に広まっていったが、それを紹介してみる。

ずいずいずっころばし　生味噌ずい
茶つぼに追われてとっぴんしょ
負けたらどんどこしょ
俵の鼠が米食って、ちゅう　ちゅう　ちゅう　ちゅう
お母さんがよんでも、お父さんが呼んでも
聞きっこなし。　（富山・長野）

ずいずいころがし　胡麻味噌ずい
茶壺に追われてとっぴんしょ
ぬけたらどんどこしょ
鰯買ったら頭をどうしょ
裏のおしょさんにあげたらいい（埼玉）

ずいずいずっころばし、ごま味噌で、
茶壺に追われて、とっぴんしゃん
つけたらどんどこどん
俵の鼠が米食ってちゅっ、ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ
お父さんが呼んでも、お母さんが呼んでも
言っこなしよ。　（富山）

変わったものに、関東一円で歌われていた

ずいずいずからもち、桑の木ずい
ずいのはら、ずいのはら、やはらでずい
茶壺に蹴られて　ちっちゃくぽん
負けたかどんどこしょ

というのもある（日本伝承童謡集成・三省堂）

所変われば品変わる趣はあるが、必ず出てくるのが、

「茶壺」である（これが肝心）。

そもそも、この歌は「指遊び」という遊びである。これは、子供たちが集まって鬼ごっこをする時の鬼定め歌である。一人が鬼になって、他の者が円陣を作って中に入り、石拳の握りこぶしを前に突き出したのを、歌を歌いながら指でつついていく。そしてこの歌の最後の者を鬼とする。あるいは歌の末尾になった者を抜かしていって、最後に残った者を鬼にする。言ってみれば、単純な遊びであるが、子供たちは、意味も分からないまま、呪文のように唱えて遊んでいたのである。

三、

ところが、この童歌のそもそもの由来は、岡場所の歌だという説がある。調べてみるとうなずかれる節も多々ある。以下概説してみよう。

その前に、性技の意味を含んだまま、童歌になった例が多くみられる。ま、今のお医者ごっこ的な遊びだったろう。

「おいどまくり」という遊びがある。男の子も女の子も、「今日は二十五日、おいどまくりはやった・・・」と歌いながら、うしろへ回って、着物の裾をくるっとまくってたわむれ遊ぶのである。これは大阪地方の遊びであるが、なぜ「二十五日」か。文化五年刊行の『摂陽落穂集』巻一（浜松歌国・さつき叢書刊行会）に「・・・西なる南中島、いまだ町家とならざる頃、大将軍（坂上田村麻呂のこと）の社へ菅神（菅原道真のこと）の鎮座ましまします。例年六月二十五日に菅神の祭礼を行はれるに、（以下筆者口語訳）元大将軍を産土神と仰ぎ申しあげていたので、つい菅神の祭礼二十五日を忘れることが度々あった。だから、村長はこの日に農作に出る人をととめ、神事に心がけさせようと画策し、今日は、農作業のための尻まくりはご法度、今日は二十五日と歌わせたので、農民たちは、気付き、尻からげをして野に出ることを止め、菅神を祭ったのである」とあるからだと言われている。

因みに、菅原道真は、生まれたのが、承和十二年六月二十五日、筑紫へ左遷の発令が昌泰四年一月二十五日、亡くなったのが延喜八年二月二十五日なのでこの日に菅公を祭るのである。

東京では「尻まくり」大分地方では「お尻はぐり」と言った。いずれにしても「お尻をまくる」には変わりがない。

しかし、この遊びの唱え方は、東京では「今日は二十八日、お尻の用心火の用心」となっている。『守貞漫稿』第二十三編（名著刊行会）に「江戸にては、菅神を信敬すること京阪に及ばず、・・・江戸の人不動を信ずる人甚だ多し。京阪にては稀なり。・・・江戸不動を信ずるの厚きは、成田山に近きが故なり」とある。二十八日は不動尊の縁日である。そこで、「今日は二十八日」そして不動尊の火焔から連想して「火の用心」となったと言われる（大阪弁・第七集・杉本書店など）。

こうして見ると「お尻」に因む二十五日も二十八日も神様と縁があったのである。菅公も不動尊も苦笑なさっているだろう。

さて本題の「すいずいずっころばし」であるが、これには、作詞家、西沢爽氏に『すいずいずっころばし私考』なる考察がある（国文学年次別論文集国文学一般一九八〇・朋文出版）。

子供の遊び歌に、性に関するものが多いことは先に述べたが、この観点から、氏は考察されている。以下要

約してみよう。

「茶壺に追われてとっぴんしゃん」の「茶壺」は「女陰」であることは言うまでもない。「とっぴ」は「どっぴ」でどっと騒ぐ意の江戸語（嫁を見にどっぴと路次へ駆けて出る・明治六年の柳多留）。「しゃん」は口拍子。以上、痴態の表現かと・・・。

「抜けたらどんどこしょ」は、「遊びからぬける、逃げる」。

「俵の鼠が」の「俵」は棚（店・借屋・長屋）か。「鼠」は「相鼠」（女房が亭主と相談づくで売春する）か、「鼠づれ」（夜這い）か、「寝通鼻をとる」（熟睡した婦女を密かに犯す）か・・・。いずれにしても性行為。

「こめくってチュウ」は「やり込められる」の「込め」で「込めをくう」という江戸語は酒落本によく見かけられる。「チュウ」は中国の「鳴口」、日本では「鼠鳴き」で、娼婦が客の気を引くための擬声語だが、この唄では「込められた女の子の悲鳴」かも知れないとは、西沢氏の推論である。

「お父っあんが呼んでも、おっ母さんが呼んでも、行きっこなァし」は、お医者ごっこに夢中の子供たちにとっては当然である。

「井戸のまわりでお茶碗欠いたのだあれ」は「井戸」は「居所」で「尻」である。「お茶碗」は無毛の女陰で、「上方では食器の茶碗は（お）をつけないことによって区別している」（江戸秘語辞典・中野栄三・雄山閣）。したがって「ねど」を「廻して」「無毛の小娘と情交（かく＝浄瑠璃社会隠語。交合する。江戸語大辞典・講談社）したのはだあれ」と、問いかけているのである。

「現代の『お医者さまごっこ』のように、親の目を盗んだ子供たちの密戯の唄と思われる」と西沢氏は推論している。

では、なぜ、どこからこの性の遊びの歌が伝播したのであろうか、ということについては、氏は次のように考察している。

「ずいずいずっころばし」とは「ついついついころばし」ではないだろうか。

すなわち、延享の頃、江戸上野辺りに「蹴っころばし」という私娼があり、「けころ見世」なるわずか二百文で春をひさぐ賤婦がいた。この女が客にうたいかけて誘ったのが、「ごまみそづい」で、これは「ごまいしょつい」の転訛であろう、と説かれるのである。昔は土壁は「木舞」といって、竹を裂いて編んだものを芯にした。この竹を編んで棕梠縄でからげとめることを「木舞をかく」という。

この木舞職人の複雑な指の動きから、女陰をまさぐる行為を江戸時代は「木舞をかく」と言った。

女房を稽古所にする　木舞かき

という古川柳があるところからでも、首肯できるだろう。

以上、猥雑な歌が、次第に童歌に移ったものであろう、というのが西沢氏の論である。

四、

この童歌がいつごろから、歌われたのかは分からないが、少なくとも、安永六年の川柳に、

①井戸端へ茶碗をおきに娘出る
②めめっこ（女性器）とちんこが井筒のぞいてる
③井戸端で小癪な子供くどき初め
④井戸端の茶碗有常油断なり
⑤珍宝のころから井筒でくらべこし
⑥井筒のきわで稽上げをまくりあい
⑦いい男井戸の向こうにいい娘

などが頻繁に出てくる（『川柳愛欲史』岡田甫・あまとりあ社）。

これらは、人口に膾炙している「伊勢物語」の「筒井筒」で、読者におかれては、高校で習ったであろう。古典の授業を思い起こしつつ、論を進めていこうと思うが、お付き合い願いたい。

「むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを…」で始まる章段であるが、以下大意を口語で述べてみる。

もう年頃になったので、男も女もお互いに恥ずかしがって、会わずにいた。でも、男はこの女を是非とも妻にしようと思い、女はこの男をわが夫にと心中固く決めていた。だから親が勧める相手には見向きもしなかった。

とこうしているうちに、この隣の男から、恋歌が贈られてきた。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ
　過ぎにけらしな妹見ざるまに

（井筒で計った私の背丈が、あなたを見ないでいるうちに、井筒を越してしまったよ）

女は応えて

くらべこし振分髪も肩過ぎぬ
　君ならずして誰かあぐべき

（お互いに長さをくらべ合ってきた私の振分髪＝髪を頭の左右に分けて垂れ下がらせた結髪法＝も肩より長く伸びました。あなたでなくて誰が私の髪を上げてくれるでしょう）

「髪上げ」は、婚約成立した男がするから「結婚する」ことである。

こうして、恋の意思表示し合ったのち、二人は「本意」のごとく結婚したのである。

その後、男の浮気が原因で離婚の危機が訪れるが、紆余曲折のあげく、二人は元の鞘に収まるという話である。

さて、前掲の川柳に戻るが、

①は茶碗が女性器を意味して極めて猥雑な句であるが、いかにも江戸っ子がにやにやしそうな川柳。

②は直截的で、極めて猥雑ではあるが、のどかな田園風景である。

③はそのまま。

④は隣の娘を紀の有常の子として、井戸端の茶碗（娘）の貞操の危機に陥して油断していた、というのだろう。

⑤幼い時から比べてきたのが振分髪ならで「珍宝」だったというもじり。

⑥はこれまたいかにも、お医者さまごっこ的である。

⑦は以上の句とはちがって、猥雑ではないが、ありそうな光景で川柳的である。

安永といえば一七七二年代だから、これらに見られる卑猥な隠語は相当古くから、また広範に使われていたと思われる。

したがって、先の岡場所での俗謡などとあいまって、どちらが先行するとは決めがたく、自然と吸収し合い、醸成し、形成され、やがて童歌に至ったと考えられないだろうか。

それが庶民の恐怖をさそう「茶壺」という言葉に邂逅し、今問題にしている「ずいずいずっころばし」の童歌になっていったのではないか。それが「これをうたって遊ぶ子供たちには意味なんて」どうでもよいことなのだ」（「歌をうたうこと」佐々木幸綱・現代詩手帖・思潮社）

「子供は、反意味的歌詞を呪文のようにうたいつつ自らの遊びを遊ぶ。うたうことで自己に没入する」（同）ことで、本来の意味（例えば、猥雑な俗謡・お茶壺道中

への恐れ)が忘れ去られて、いつのまにか、呪文を唱えるように、童歌に溺没していったのではないかと思われる。

それにしても「お茶壺道中」はいろいろな騒着、波瀾を起こしたものだ。元はと言えば、「美味しいお茶を飲みたい」がための特権階級のわがままから・・・。

しかしながら、お茶は誰にとっても美味しいのだ・・・。

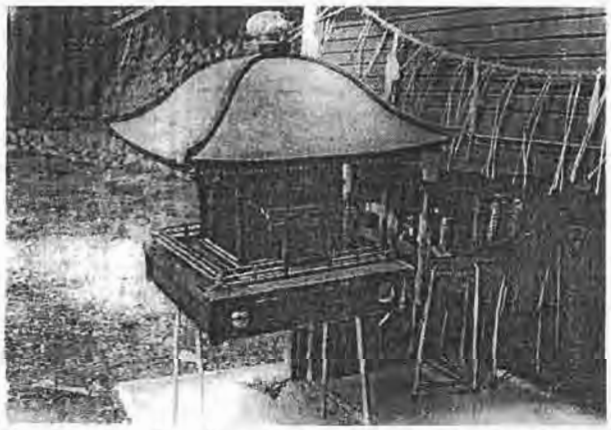
終わり

★長い間ご愛読くださってありがとうございました。川根本町誕生をきっかけに、休憩させていただきます。また機会がありましたら筆を執らせていただきたいと思います。中川根町の新しい出発と発展を心からお祈り申しあげます。

編集室より・お茶あれこれ〝七回に渡り寄稿いただきありがとうございました。緑茶に関して、科学的・文学的・歴史的・民族的等、多方面の見知からの論文、茶どころ中川根発のこの通信が元気になりました。又、茶産地住民でありながら知らなかった事も多く、勉強になりました。

それにしても、「ずいずいずっころばし」の真意にはびっくりしました。考えてみますと、何に気なく歌っていた童歌にも、表語の自由を奪われた時代から、生きる喜びや楽しみを、脈々と歌いつないで来ているのだな―、と感心しました。ほしいものは何でも手に入り、ほしい情報は、居ながらにして求められる現代ですが、お金と機械を通して得られたものと、何百年と続いている人の営みからの童歌とを比較することはしませんが、やはり、童歌は、後世の人達に歌ってもらいたいと思いました。私達も「つねひごろ、童歌や童謡・唱歌・民謡・歌謡曲」を大いに歌いましょう。

徳山地区八幡宮の神輿と随身像見つかる



七月初旬、徳山の山下功さんを訪ねた時に「先年、浅間神社の物置きから八幡宮の神輿が見つかりました。いつの時代、誰が造ったものか判りませんが、古いものです。何とか世に出したいと思いますが・・・」との話を伺い、平成八年に山下さんが調査された『徳山神社古伝神楽由来記―概要―』と共に上記写真をいただきました。

徳山地区の古い歴史を物語る、平安時代初期・中期創建の神社、神楽・古典芸能(唐ん舞・ヒーヤイ踊り狂言)など、徳山地区全体が文化財の地区です。山下さんからの調査書をもとに、同時期に見つかった八幡宮の随身門の随身像写真や関連神社の見取図、所見をお届けします。

徳山神社古伝神楽由来記―概要―

原本　林家所蔵(現町教委保管、和半紙版二つ折五頁

明治二十年代後期(推定)毛筆記述・年月記述者無

概要・括弧書(　)重要箇所　山下功氏・平成八年八月記

一、徳山神社(元徳山牛頭天王社、明治三年改称)には古くから社伝の神楽式がある。この神楽式は、昔この神社の神官林左衛門と云う人が、出雲の国より習得してきて、氏子等に伝習し、この神社祭典に執行し、その儀式を代々受け継いで伝えてきたものと云い伝えられている。

二、この儀式の伝承は、永い歳月を経ているので「誤りもあり、遺漏たることもあり」として、寛永二十年(一六四三)二月、徳山牛頭天王社(以下天王社と記す)、八幡宮祠官林式部丈輔直之と、八幡宮祠官加藤権少(八幡宮は明治三年までは林、加藤両氏奉務)の両翁が協議し、校合撰定して本来の純粋な神楽式を定めた。

同時に、八幡宮が昔から神輿渡御式で、正島タケノハナに渡御し祭典を行っていたが、この年九月十五日天王社祭典時に当り、同社境内に仮殿を造り、八幡宮の神輿が渡御し神楽を奏し、祭典を執行することと定めた。

三、以後、代々伝承してきたが、寛政六年(一七九四)八月に、百五十年前と同様の事態で、八幡宮祠官加藤河内正と、天王社・八幡宮・浅間大明神・御嶽大権現四社の祠官林長門正の両翁が合議して、遺漏のないよう本来の形に復元した。

四、文政六年(一八二三)に八幡宮神輿の天王社渡御を止め、正島タケノハナのみに渡御した。(明治三十五年の壱社伝来旧式調書では、天王社の神輿渡御、式六月十五日例祭時、島の河原渡御を寛政七年以後廃止と。また、八幡宮の調書では天王社社内渡御廃止は寛政七年とある。)

五、明治三年(一八七〇)八幡宮の神輿渡御を全廃した。(八幡神社壱社伝来旧式調書には全廃が明治四年とある。八幡宮は明治四年八幡神社と改称、明治十年浅間神社、御嶽神社境内に移転、三社相殿となる)

六、明治四年(一八七一)徳山神社の古伝神楽式を廃止した。

七、明治三十三年(一八九〇)九月、徳山神社神官林源市主、八幡神社旧神官加藤河内正、徳山神社・八幡神社旧神官林長雄、八幡神社・浅間神社旧神官加藤鎮雲主の四氏等が、古伝神楽式の再興を発起、氏子西角甚代、村松清助、杉山武平、大畑興四郎、杉山菊蔵等と相談し、二十年間廃絶した社伝神楽式を再興、同年十二月十五日徳山神社祭典に執行し、これより、この儀式を永世に伝えようとした。

八、明治二十四年(一八九一)九月頃、静岡県藤枝警察署、島田分署、徳山村堀之内駐在所詰の竹本正則氏が、二十年間廃絶の神輿渡御式を日本心振起に再興を提唱。徳山神社神官林源市、八幡神社神官奈良間源七、旧神官の加藤河雄・林長雄・加藤鎮雲の五氏と、氏子総代前田久左衛門、青木亀次、金子源三郎、人民総代山本賀次郎の四氏が協議し、提案を承諾、十二月一日徳山神社祭典に社内に仮殿を造り、八幡神社の神輿渡御が復活することになった。

これにより、徳山神社神官林源市、八幡神社神官奈良間源七両氏は、旧神官を率いて神輿を護衛し、氏子総代の三氏は氏子信徒を率い、人民総代は衆庶を率いて神輿を奉護し、警察官竹本正則氏は、消防長蒔田善次氏とともに消防夫数十名を率いて神輿を警衛し、徳山神社に奉迎して祭祀を行ない神楽を奏し、大祭典を執行し、この式典をもって永遠に本社に伝えるものとした。

(数十年前古老の話で、この十二月一日の例祭が麦農の時期に当り、野志本正島地区以外関心が薄く、行列の道脇で下肥の施肥作業中の者などがあり、好ましくないとの意向で、いつの頃からか、取り止めたと聞いた記憶がある。 完)

大変興味ある書面だと思います。以下感想を述べますと。

★正島(しょうじま)の八幡宮は大きなお宮で、昔から神事に神輿渡御が行われていた事、祭典の時は、タケノハナにて(正島地内)渡御式を行っていたが、今から約三六〇年前の寛永年間には、天王社(隣の野志本地内)境内仮殿にて、神輿が渡御

し、神楽を奏し、天王社の祭典を執行するようになった。その後、神輿の渡御は、一八〇年位続いたが、寛政年間か、文政年間に中止し、正島の夕ケノハナのみの渡御となり、後、約五十年続き、明治の初め全廃となった。

＊徳山神社の神官は、林左衛門…→林直之…→林長門…→林源一＝林家。

八幡宮の神官は加鹿権少…→加鹿河内＝加鹿家と林家と徳山に在った神社の官職は二家が多くたずさわり、神楽式のやり方も二家が協議し、校合撰定して、純粋な神楽式を定めて、後世に残そうとしている。（大きな見直しは二回）

注目すべきは、徳山神社氏子は神楽・八幡宮氏子は神輿＋神楽を古来から伝承していたのではないだろうか。

又、現在、県指定無形文化財の徳山神楽は、徳山神社の神楽に八幡宮の神楽がミックスされているのではないだろうか。（その大部分が八幡宮の神楽式であるとも考えられるのだが）

＊明治四年、徳山神社の古伝神楽式を廃止とあり、当時、寺社統廃合令、廃仏毀釈にゆれ、古代から脈々と続けられてきた神楽式も神輿渡御も中止となった。徳山地区に点在していた多くの神社も合祀され、浅間神社（御嶽・八幡三社）、徳山神社の二社が残った。

＊明治二十三年、二十年間廃絶していた徳山神社の社伝神楽式を再興した。

＊翌二十四年、八幡神社の神輿渡御が復活。（徳山神社祭典十二月一日に社内に仮殿を造り、奉迎して祭祀を行ない神楽を奏する）これから永遠に行うこととしたが、八幡神社が野志本、正島の人々以外感心がなかった事と、時期が麦搗の時期であり、下肥をかけたり、におったりする中の神輿の渡御はよろしくないと、いつの頃からか、中止したらしい。

＊八幡神社（八幡宮）は天喜三年（一〇五五年）土岐山城守が創建する。祭神誉田別命

＊徳山神社は仁和四年（八八八年）須賀社として創建、永承四年（一〇四九年）徳山牛頭天王社と改称　祭神足名椎命・稲佐之男命・櫛名田比売命・手名椎命・土岐山城守命。

＊八幡神社神輿渡御行列の内容は、

行路　猿田彦の面を被り、通を清める。

タテハキ　二人　刀を帯び、弓矢を持ち並ぶ

祓主　祓麻を持ち、左右に振りながら行く。

槍　二本

玉串　榊にシデをつけて進む

刀　二口

鉾　二本

剣　二口

神官　二人

大傘　二本　神官にさしかける

神輿　四人に烏帽子・羽織・袴にてかつぐ

大傘　神輿にさしかける

剣　二口

鉾　二本

刀　二口

神饌棚　二人にて持つ

槍　二本

大鼓　一人にて背負う

音楽人　三人笛吹き、二人大鼓打ち、

槍　二本

氏子総代

村役員

衆庶

神輿渡御の様子は
行列41人と村役員と衆庶となるらしい

★神輿渡御の行列は総勢では百人をこえる体勢であったろうか、と想像してみても、古代から中世近世に至るロマンに入り込んでしまうのですが、実際八幡宮の本殿（神楽殿）においても、神楽が舞われ、奉納される盛大な祭りがくりひろげられていたのではないだろうか、と想いをめぐらせても見ました。

★八幡宮は、徳山地区で一番位の高いお宮だと聞いていますので、お宮の歴史を調べてみました。

旧社名	旧社領	創建年	記事
浅間神社	二石五斗	天喜三年	旧浅間大神→浅間大明神
御嶽神社	五石七斗五升	天喜三年（仁和三年の説あり）	土岐山城守創建（明治八年以前は現浅間神社境内が御嶽神社であった）
八幡宮	十二石五斗	天喜三年	社殿十石は田野口村に、二石五斗は藤川村にあり、明治四年八幡神社に明治十年浅間神社に合祀
徳山牛頭天王社	二石五斗	仁和四年	林氏の祖先、左衛門大夫（須賀社創建）

中川根町史資料編に記載されており、社領の十二石五斗は現中川根町内では一番の石高で、野志本、正島の外に田野口、藤川も支配していて、宮の膝の社殿入口には随身門があり、上の写真の護身像（俗に矢大神、左大神）が弓矢を持って、左右に座っていたという。

★注目すべきは、八幡宮、御嶽神社、浅間神社ともに天喜三年（一〇五五年）に創建され、土岐山城守がかかわっている事で、すでに平安時代前期には、徳山地区には、野志本、正島、本村（上村・下村）の集落が形成されていたことになる。

★徳山の祖、土岐氏はどの様な系統なのか、調べてみました。

※駿河北部の豪族に土岐氏、小長谷氏、大間氏、巣科氏などがいたが、その中で土岐氏が一番古い。

※土岐氏と小長谷氏は同族であること。（初め土岐、後小長谷）（土岐の山の城＝徳山城、土岐の谷の城＝徳谷城＝小長谷城）

系図

清和源氏……源頼信（九六八～一〇四八）→頼義（九八五～一〇七八）→清房（河内の国）→清則（駿河に移住）→忠政→定康→長次→信則→則義（永仁年中（一二九三～一二九九）小長谷に居住）→則明→尚政（浅間愛三著・巴双連山を中心とせる諸城址の研究 その他より）

河内源氏の祖

孫　子　子　子　子　子　孫　子

によると、土岐山城守は清則か忠政の本人か、その兄弟にあたり文和二年（一三五三）二月の徳山城の戦いは則明か尚政または、その兄弟にあたり、土岐彦太郎と名乗ったと、推測されます。河内源氏の清則が駿河に移住した先が徳山だったとしたら、八幡宮、御嶽神社、浅間大神、徳山牛頭天王社の創建、改建も可能だったと考えられますし、八幡宮の神官職二家の加藤河内、林長門、名もうなづけるところです。

★土岐氏の支配した時代の徳山城を本城とする支城、砦の関係をたどってみます。以前ふる里通信に特集徳山城を載せたことがありますが、今一度ここで記載してみますと、ハッとする事があります。

本城支城の関係は、本城徳山城、支城護應土城、小長谷城（本川根町）萩多和城（静岡市大川自向）笹間城（川根町笹間）砦、相俣砦（静岡市上相俣）塩郷砦（中川根町塩郷）など

大井川上流・中流部左岸山岳地域と、藁科川中・上流部を含む拡大な地域で、土岐氏の力の大きかった事がわかります。

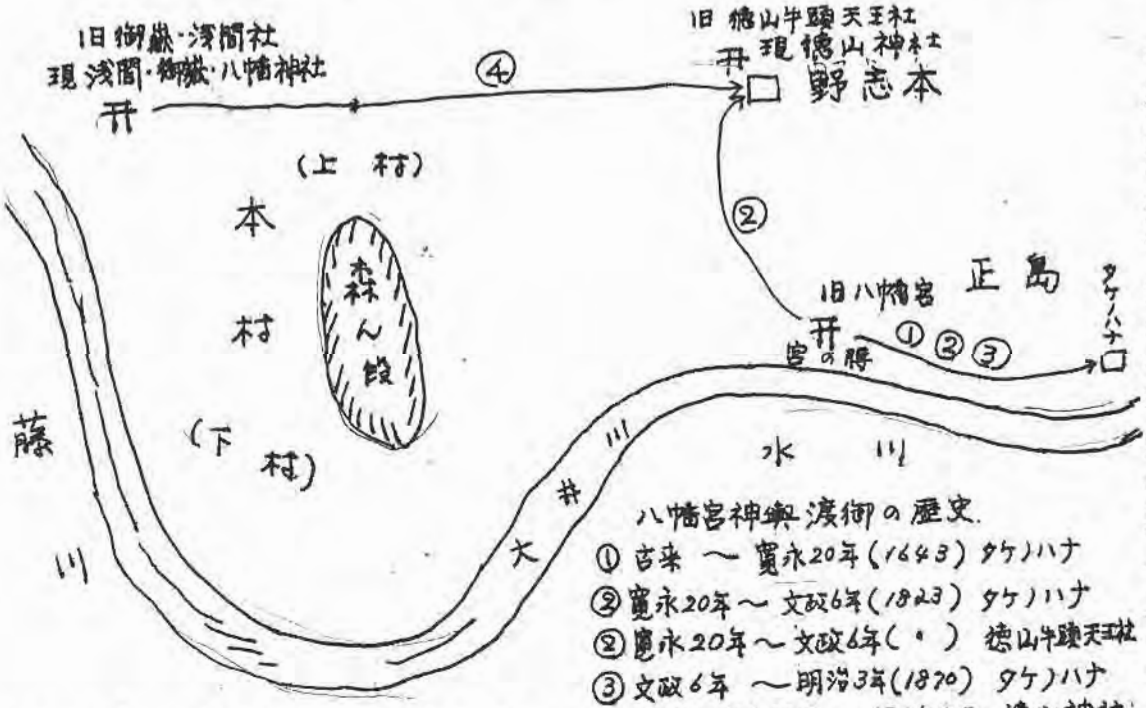
★その地域には、徳山神楽と似た形式の神楽があります。笹間、徳山、青部、崎平、坂京、田代、平栗、長島、梅地、大間など大井川本流、支流地域と、藁科川中・上流部各地域にある清沢神楽で、毎年奉納される徳山、梅津、清沢、笹間神楽は有名ですが、数年に一度の奉納や、復活された地域など、さまざまです。神楽式の中に、土岐山城守云々が盛り込まれている所も多くあるとの事です。（殿とーて）

★前記神楽の残っている地域と、土岐氏に深い関係のある地域の人々は、方言＝ギラ言葉を使う地域と重なります。今回、八幡宮で神楽を舞っていたらしい事がわかり、田野口、藤川地区も土岐氏や神楽に関係があり、又ギラも使えるから、新発見だと喜んでいます。ちなみに、中川根町の話し言葉は地区を分けるほど複雑ですが、ギラ言葉を使える地区は、徳山・志町河内・文沢・田野口と、藤川地区で、地区別に多少の違いはありますが、使わない人達とは一別でき、その地域に、お嫁に行ったり、移り住んだ人達は、ギラ言葉が移ってしまう特徴がありました。これは、つい近年まで脈々と続けられて来た事ですが、テレビ時代になってから、ギラ言葉は若い世代を中心に次第に消え、流行語や、テレビタレントの使う言葉や、少女達の使う、乱暴な言葉が聞こえてきますから、ギラ言葉も近い将来消えてしまう運命だと思います。

★徳山神楽を中心とした、大井川、藁科川の神楽式と、話し言葉（ギラ言葉）は、土岐氏（小長谷氏）の残してくれた文化で、それを守る心豊かな人々が、伝えられた文化を護り育てている素晴しい地域です。

※山下功さんからいただいた『徳山神社古伝神楽由来記＝概要＝』から始まり、長い文章になりました点をお詫び申し上げます。　文書責任者　小沢節子

※参考文献：無双連山を中心とせる諸城址の研究・沼館愛三
中川根町史資料編、徳山神楽調査報告書・中川根町古典芸能保存会



八幡宮神輿渡御の歴史

① 古来 ～ 寛永20年（1643）タケノハナ
② 寛永20年～文政6年（1823）タケノハナ
② 寛永20年～文政6年（〃）徳山牛頭天王社
③ 文政6年 ～明治3年（1870）タケノハナ
④ 明治24年（1891）～何十年か？ 徳山神社（八幡神社）

旧八幡宮、八幡神社神輿渡御図

※一応上記略図の様な通路で渡御が行われていたようです。

※正島タケノハナの場所が何人かの方々に伺ったところ、いま一はっきりしませんが、タケノハナ＝島の河原＝正島の南の端ではないだろうか、と言うことになりました。

※本村（堀之内）と野志本の間には桃ん沢扇状地（現川根高校・あかいしの郷など）があり、つい近年までは、一本道でずい分遠い所の感じがあったようです。

心に残る手紙

鼓高木　純さんより

拝啓

間もなく御地の河原添いに植えられた柳が、色とりどりの萌えいずる緑に飾られ、眠いような、うっとりした早春の緑の交響詩を谷間に奏でる時季になりますね。毎年春が近づくと、長尾川の堤添いの柳の淡黄から淡い緑の芽を想い出して、幼い日々の事など思います。

ふるさとと言う言葉は懐古的、懐郷的な甘いやさしさを持っています。私はドイツ語のハイマートと言う言葉が好きです。

私のハイマートは何処かと思案もします。現実には、それは鎌倉ですね。鎌倉で生まれ、育ち、暮らして来ました。上長尾どころではない、著しい鎌倉の変貌を見、経験して来ました。上長尾は私の感傷のふるさとであり、幼い日の楽しい遊びの山野なのかも知れません。

鎌倉とは対照的な山や川、そして濃い緑、素朴な生活、素朴な生活の匂いは、底抜け明るくみやびた鎌倉の夏、海の夏に比べて、上長尾の夏は静的な私を包みこんでくれるようなものでした。山や樹々のもつ沈んだ明るさは、海の、人をつきはなす明るさに比べて、私には親しさを憶えさせるものでした。

長尾川の澱んだ流れは活魔物のような力強さを感じさせてくれました。大井川の濁った流れは一見、恐ろしいものではありましたが、岩に襲いかかり白い牙をむいて見せる海の波濤とは異る親しさを感じもした事を覚えています。深い緑色の淵にじっと身をひそめているような魚たちの姿も、海瀬に泳ぐ魚とは異ったものでした。このようなことどもは、上長尾のそこにあった、ありのままのたたずまいなのでしょう。

そうしたたたずまいの中で、人は考えたのです。人はそのたたずまいの構成要素だったのかも知れませんね。私は、でも、やはり異邦人だったのだと思います。そんな上長尾を外から眺めて感傷に浸っていたのか、或いは、構成員の一つになりたいと思っていたのか。

崎平小学校での一年弱の教員経験も、やはり異邦人としてのものかも知れません。朝暗いうちに起きて、吊り橋を渡り田野口から一番の汽車に乗って、そして多くは終車で帰って来ました。吊り橋の脇の竹藪の湿った香、風が秘やかに吹き抜けていく音、それらが夜のしじまの中で、息づいているようでした。上長尾でのあれこれの日々の思い出は何だったのかと思っても見ます。

ふるさとと言う時、それは生まれなじんだ山野のように思いがちですが、実際には、なじんだ周りの人々、自分を自分として受け入れてくれた人々が、本当のふるさとではないのだろうか。

数年前ルーツと言う言葉が流行しました。ルーツは、自分の生まれのオリジレを求める奴隷となった黒人の子孫の切実な願望からの言葉でした。彼らにとって、自分達をホントに和ませ、いやしてくれるものがない、彼らは生まれ育ったアメリカを異郷と捉えた。私の推測ですが、彼らの生活の根底にある部族への帰属意識からではないでしょうか。吾々にとって、部族と言うと何か原始的な感じさえしてしまうが、外国に日本人町を作ったりするのは、部族意識の変形かも知れません。ルーツも人の問題です。ふるさとと深い関係があると思います。

この頃よく耳にする自然とふるさとは、何の関係もないと私は思っています。人間が作った都市では"私"をとりまくのは、人工的な"人"の自然です。自分をいやしてくれるふるさと的な人はいません。でも村落や谷合の町では、人をとり囲むのは自然です。自然の中でこそ、人は人と寄りそえる。孤独を分かち合い、いやし合う事が可能なのでしょう。それは人とではなく、そこでは自然に対して、人は対立しているからです。ふるさとの構図は、こんな所に見えてくるのではないでしょうか。

現在の吾々は、いろいろな意味でふるさとを失いつつあると思います。人との関係を、孤独をいやしてくれるような人との関係を失っているからです。観光が意味するものも、リゾートが意味するものも、ふるさとへの真の回帰を人に与えてくれるものではありません。共に介在するものはお金であり、その地の経済的発展を求めているからです。ふるさとを作るためには、ふるさとの基本になる人との関係を作るように考えねばならないのではないでしょうか。

生まれ育ったふるさとは、その時間的経過の中で、人との関係が自然に形成されて行くから、ふるさとになれるのだと思います。ですから、もし、生まれ育っても、このプロセスが欠けていたら、その人にとって、ふるさとにはなり得ません。逆に言えば、生まれ育たなくても、ふるさと的な人との関係を形成し得るならば、それはふるさとになるでしょう。

貴女が、山野の溢れる上長尾の再生を切に願い、どうしたら、と言う思いが冊子の通信から伝わって来るのです。地方が、そして、小さな町や村が都市のように、外見上の豊かさを得る事は、絶対にあり得ないでしょう。二十一世紀はいろいろな意味で、日本だけでなく、全地球的にも地方の時代になると思います。それは経済効率や社会生活での画一性からはなれた個性的な、別の言葉で言うならば、それぞれ、マチマチな在り方を主張するような地方の時代です。

経済効率の追求は所詮エネルギー問題から無理になります。貧しさの基準は、自分が尺度するもので、外から測られるものではなくなるでしょう。上長尾(中川根)としての貧しさも豊かさの基準を作り、自給態制を整え、万人のふるさとともなれるような、人との関係のふるさと作りを目指す事が大切ではないだろうか。他人者を自分として受け取り、包摂する人間関係の形成が、ふるさと再生の第一歩のように思えます。

他旅人をふるさとの人として許容し、包容し得る、そしてそれが、川根にしかない固有なものを提示することだと思います。家族の一員に味わってもらいたいと思うようなものを提供するのもよいでしょうし、山村が成り立つための仕事を手伝ってもらうような、例えば、茶摘み(これは私もしました)炭仕事、山仕事等々を、家族の一員のようにしてもらうシステムの形成。"一日ふるさと制度"のようなものを組織化する。短い期間でも頑固な老人たちと起居を共にする事は、若い家族にとって、新しいいろいろな発見の機会を与える事になると信じます。

文化は、その定められた空間面には育つものではありません。川根が長い時間をかけて形成し育てた川根の文化は川根の生活の中にしか存在し得ないと、極言することさえ出来ます。貴女方、川根の方々が、川根の発展と将来を見方を考えて、進まれます事をお願い申し上げます。

敬　昊

一九九六年(平成八年)三月

ふる里通信を発刊して十年過ぎた頃でしょうか。高木 純さん

より前記のような便りがとどきました。きっかけは、高木二郎著「我が父を語る『高木壬太郎』」を風の便りにて、高木二郎さんの妻のマサさんに送った事からではなかったかと思います。

そして二年後一九九八年五月六日脳出血のために逝去されました。享年六八歳。突然の死の連絡が届いた時は驚きましたが、高木家の人々は、頭脳明晰、清廉潔白、学者、…だが脳出血で人々に惜しまれて来世へ旅立つ家系…、そして純さんもそうでした。

高木純氏の略歴（敬省略）

高木純は、昭和四年父二郎母マサの三男として鎌倉に生まれた。祖父高木壬太郎は、カナダ・トロント市のヴィクトリア大学より日本人最初の神学博士号を受け、第四代青山学院院長を務めた人であり、キリスト教の信仰を豊かに培う家庭を作っていた。父二郎は、理論物理学者であり、代々学者としての厳しい精神生活を営む中で成長した。旧制静岡高等学校卒業、一九五〇年東京大学入学、その秋結核を発病し、四年間休学。一九五四年復学。後、化学系大学院博士課程に進み、東京大学応用微生物研究所にて研究を続け、後、理化学研究所に勤務、一九六九年から、国際キリスト教大学理学科教師として分子生物学を担当。一九九五年、大学を定年退職、以上。

高木壬太郎博士が世界的に有名な方であったため、中川根の地は、高木のふるさとであったといわれています。

高木壬太郎には三人の男子が育ち、長男一三、二男二郎、三男武夫とそれぞれ立派に育ちました。中でも二郎氏は、昭和二十余年から三十年代まで、中川根町上長尾（高郷）に住み、女子高校の校長職を務められたり、晩年は、お茶や柿の栽培をやったり、東京大学物理学部優等首席、戦水艦の心臓部設計者の実力も、ほとんど明かす事なく地域の人となり、純さんの姉の直子さんは、田中川根中学校の教師を務められたようです。今回、私の胸中に高木純さんの手紙をしまっておくには、申しわけなく、ふる里通信にてご紹介致しました。

（叩敬省略）

＊＊＊定期購読のお願い＊＊＊

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　テ共　200円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。基本は年4回の発行ですが、この1年間はかなり増刊になる予定です。（中川根の町名があるうちに、なるべく多く発刊したいと計画しております）

購読料が切れた方には、振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読いただきたく、お願いします。

もし、購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

郵便振替通知票番号
00870－4－81556
発行責任者　〒428－0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾859－6
小沢節子
TEL. 0547－56－0015
FAX 0547－56－0020

静岡市の山本隆四さんから、ステキな暑中見舞が届きました。

本当に暑いですね。真夏日連続記録更新中とか。

71号発刊後、すぐに72号が発刊されます。

お届けする記事が多くなり、同時発送となりそうです。

合併が1年後となりました。中川根ふる里通信も80号をめざして頑張ります。